

平成10年度の動物学会賞等の選考を終えて

動物学会賞等選考委員会委員長

石川 統

各年度の動物学会賞等の選考委員は、前年秋の評議員会の場で互選によって選ばれる。選考委員会のおもな役割は動物学会賞、同奨励賞受賞者の選考だが、各種団体の公募する研究助成金等に対して、学会としてどの応募者を推薦するかを決めるのもその役目である。今年度、これらの任にあたりつつあるのは、分野別に選ばれた西川輝昭（分類・生態）、新井康允（形態・内分泌）、高木由臣（細胞・遺伝）、浅島 誠（発生）、道端 斎（生理）、石川 統（生化学）であり、私が委員長としてとりまとめ役を務めている。動物学会賞および同奨励賞の選考に当たっては、まず選考委員会が応募者の中から受賞候補者を選び、評議員会がその選考経過と結果の報告を受けて、可否の投票によって受賞者を決定するという手順を踏む。ところが、今年度は私のつごうで選考委員会の開催が例年より大幅に遅れてしまい、応募者や推薦者の方々に気をもませる結果となってしまった。この点をまず、お詫びしなければならない。

選考委員会は6月13日（土）午後2時から東京大学理学部2号館会議室において開催された。今年度の応募者は動物学会賞が4組5人、同奨励賞が4人であった。3時間近くにわたって各委員の間に忌憚のない意見を交換した結果、学会賞受賞候補者として1人、奨励賞受賞候補者として2人を推薦することとしたが、後に稟議による評議員会において、推薦どおりに同3氏（別項参照）が今年度の受賞者に決定された。それにしても、このような選考は実に難しい。それぞれに立派な業績をもち、しかも異なる分野で、異なるアプローチをしている応募者

に対しては、どのような基準で選考しても、必ず異論が出るからである。多くの顕彰制度で選考経過を秘密にするのはそのせいだが、そうすると今度は不明朗であるとの批判があったり、「黒いうわさ」のネタにさえなりかねない。私は今回、これらを勘案した上で、選考委員会における実際の選考経過を、ごくかいつまんでだが、応募者の名は伏せて各評議員へお伝えした。

ところで、このところ選考委員会の内外で話題になっていることは、学会賞や奨励賞への応募者数の漸減傾向である。たしかに後者の方は前年よりは増えたが、両賞を合わせてみたとき、その傾向は拭いがたい。「賞を貰うために研究をやっているのではない」という意見もあるだろうが、そういう方々には、受賞は研究を発展させるバネになるとアドバイスしたい。「くれるなら貰ってもいいが、自分からは言い出しにくい」という考えが一番多いのではないだろうか。たしかに、わが国の風土では自薦はしにくい、他薦には抵抗はないはずである。身近を見渡せば、優れた業績を挙げている同輩や後輩が必ず1人や2人はいるはずである。ある程度以上の年齢の会員にとっては、そのような人々に受賞のチャンスを与えるよう推薦の労をとることが、1つの義務であるとは考えられないだろうか。わずか数人で構成されている関係で、選考委員会が常に正しい選考をできると断言はできない。しかし、選考経過が秘密であるか否かにはかわらず、それが公平かつ明朗なものであることは信じていただきたいと思う。

生物科学ニュース 1998年9月号
p. 17